

令和4年度 第3回学校運営協議会 議事録

- 1 日 時 令和4年8月1日（月）午前9時30分から11時まで
- 2 出席者 玉木健治様（地域コーディネーター） 鍋田正明様（中村町自治会長）
大橋典子様（PTA会長） 本田道子様（ありんこの里管理者）
望月雄司様（静岡市大里生涯学習センター長）
枝 賢一様（小糸製作所人事部企画課）
望月映延様（JA静岡中央会広報部長）
校長、副校長、小学部主事、中学部主事、地域支援部長
- 3 場 所 会議室

4 校長挨拶

今、心配されるのは新型コロナウイルス感染症の感染状況である。学級閉鎖になっている学校も何校かあると聞いている。本校は「口が見えるマスク」を使用しているため、感染者が出た時の濃厚接触者の特定には苦勞することになるが、何とか終業式を無事に迎えることができた。夏季休業に入り、教職員は研修を受けている。

サル痘も出てきており、これから先のことが見えづらい世の中ではあるが、物事に対し新しい見方をしながら先のことを想像していかななくてはならないと感じている。

5 協議テーマ

本日は、協議テーマを「子どもたちの職業的自立のために必要な力とは」と設定した。本校は聴覚障害の学校であるが、それに限らず企業や就労機関にお勤めの本田様、望月映延様、枝様に働くために必要な力が何かを伺い、今の本校の子どもたちの課題などから協議を進めていきたいと考えている。

6 協議内容

本田 委員 一般就労をしていたが適応できずに最終的にありんこの里に来る方が何人かいる。課題としてはやはりコミュニケーションだと思う。手段は様々であり、伝える側はそれぞれの方の実態に合わせられるが、それを受け取ることが課題だと感じている。自分から挨拶をすることは特に大切だと感じている。職員と目を合わせることもできない方もいるし、仕事に対する意欲も人それぞれである。仕事は個々の実情に合わせて設定するようにしているが、誰の話でも落ち着いて聞けることがまずは大事である。

望月映延委員 一般論としてお話をしたい。言われたことは真面目にこなすことはできるが、何か足りないことなどが出てきた時に、自分からは行動せず、指示を待っている若者が多いと感じている。自分からある程度コミュニケーションをとって仕事をしていく力が必要だと思う。

玉木 委員 聴覚障害者の就労後の様子で聞こえないふり、分かったふり、聞こえたふりをするといったことが課題によく挙がっていた。コミュニケーション手段だけではなく、同時に気持ちの面での課題がある。

枝 委員 こちらがどこまでサポートすると良いのかが分かりづらいことがある。分からないことははっきりと分からないと言ってもらった方が良いのだが、なかなか自分からは聞けない方もいるようだ。コミュニケーションを改善していくこと

がより良い就労に繋がると思う。

玉木 委員 コミュニケーション不足によって困ったことなどの事例があれば具体例を教えてください。

枝 委員 思い込みや勘違いによるミスが起きたことがあった。確認すれば起きないミスだったと思う。

玉木 委員 自治会などでの今の様子はどうか。

鍋田 委員 コロナ禍ではあるが社会の動きを止めることはないので、自治会でも行事は止めないようにしている。今朝もラジオ体操には100人近い人が参加してくれた。子どもたちも社会に出て昔ながらの関わりや原体験がより必要になると思う。

大橋 委員 地域で出会った人と子どもたちが話す機会が減っている。挨拶ですら不審者対応で難しい。人間関係が希薄になっているのではないかと感じている。

玉木 委員 就労前に社会性を付けることを目標にしているはずが、子どもたちが社会に出ていくこと自体が難しくなってしまう、矛盾した状態だと思う。

望月雄司委員 自分から分からないことや障害をもっていること、障害について説明ができることが大事であり、周りがそれを支えられるようになっていくと良い。

副 校 長 自分のことを説明できる力が話題になっているが、学校でも課題として研修を積んでいる。地域支援部での取り組みを紹介したい。

小林 教諭 通級生に対し、自分の聞こえについて説明する力が必要であると指導している。なかなか通級生自身が必要性を感じるのが難しいが、自分の聞こえのトリセツを作って形にしている。

玉木 委員 障害をもつ人が自分のことを説明する力ももちろんだが、それを受け入れられる社会を作っていくことが大事だと思っている。以前、就労に関わっていた時に、企業の方から聴覚障害の人たちは要求が多く、言葉がきついのではないかと言われたことがある。

校 長 知的障害の特支校に勤めていた時に、障害の自己理解と他者理解「自分が苦手なこと」「サポートがあればできるようになること」を理解することに力を入れて指導していた。自分自身がやりがいを感じられることや、認められる場所での自己実現が大切である。今の若者の考え方が変わっていると感じている。生まれた時からネット環境が整っていて、調べたらすぐに答えが出せる時代に生まれた。だから今の若者は結論をすぐに求めがちなのではないか。だからこそ、コミュニケーション手段を考えていかなければならない時代なのではないか。

玉木 委員 コミュニケーションスキルの問題と、人間関係におけるコミュニケーションの問題があると思うが、小学部の様子や取り組みを教えてください。

赤堀 教諭 小学部では、学期末に子どもたちに対して「がんばり賞」を渡している。「挨拶が素晴らしい子」「目標をもって努力した子」「みんなのために頑張った子」の3つについて5人を表彰した。その中で「挨拶」については、学部職員から一人しか推薦が無かったことが残念だった。一番下の学年の児童だったが、地域に出た時に元気な挨拶ができたことを学部集会やお便りで紹介した。小学部は家庭を巻き込みやすい段階なので、家庭と一緒に子どもたちを育てていきたいと考えている。

玉木 委員 褒めることから育てていくことはとても良いと思う。教員が手本になること、友達が良かったらそれをみんなの前で褒めてあげることが良い。中学部ではどうか。

- 本間教諭 真面目な子どもたちである。教員が丁寧に準備をし過ぎないようにし、子どもたちの自主性を奪わないように常々学部内で確認している。子どもたちの半年後、1年後の姿を描きながら、点ではなく線での指導を意識している。
- 玉木 委員 子どもたちが柔軟性や臨機応変に対応していく力を育てることはとても大事だと思う。同時に、見守るだけでなく、教員が子どもたちについて細かく見取り、指導の引き出しをたくさん持って子どもたちの必要な時に必要な指導ができる教員であるかどうかということも大切であると思う。
- 校長 配付資料は、他校の知的特支に勤めていた時の取り組みだが、高校と一緒に農業を通して連携し、学校間に留まらず、地域と共に活動した。子どもたちは学校だけでなく総合的に育てていかななくてはいけないと考えている。挨拶一つとっても学校だけで育てるのではなく、まず朝起きた時に「おはよう」の挨拶を交わす家庭なのかどうかということも大きい。
- 玉木 委員 盲学校や聾学校は歴史が古いため、進路指導もある程度積み重ねてきたことがあるが、知的障害の特別支援学校での新しい進路指導の取り組みがとても刺激になるのではないか。今でも特別支援学校と農業での連携はあるのか。
- 望月映延委員 今でも繋がりをもって取り組みを進めている。
- 副校長 沼津聴覚特支の進路指導課から出している資料から「社会のルールや常識を守ることができる」、「学校と職場は違うという認識をもつ」、「働きたいという強い気持ちをもつ」ことが自立に向けて必要であると記載されていたが、これらを学校でどのように育てていけば良いか、アドバイスをいただきたい。
- 玉木 委員 今の副校長が配付した資料や今日の協議会を通し、まとめとして最後に皆さんからお考えを伺いたい。
- 鍋田 委員 農業との繋がりのお話が印象に残った。今の時代、人間の生活力がすごく求められているのではないかと思う。そういう視点をもって教育の見直しがされていくと良いのではないかと思う。
- 大橋 委員 スマホで調べられる分、知識はあるが、体験をしていない子が多くなったと思う。自分が子どもの頃は、学校で飯ごう炊飯をしたり、バザーでお金のやりとりをしたりした。学ばなければいけないことが増え、行事が削られているようだが、子どもたちには体験をもっとしてほしいと思っている。
- 本田 委員 受け入れる立場としてやっていかななくてはならないことがあると改めて感じた。
- 望月雄司委員 最後に配付された資料は、障害をもった方だけではなくて社会に出る上で誰もが大切になることなのではないかと思った。お金の価値の理解など、いろいろな経験から分かることがあると思う。
- 望月映延委員 この資料に書かれた力を全て兼ね備えた人はいないと思う。目立ちたくないという思いが強くて自分からは話さず、後から気付いた人に叱られてほっとしているような若者もいる。お互いに足りない部分を補いながらも最低限のことは身に付けていることが大事なのではないか。
- 枝 委員 小学部や中学部での取り組みを聞く中で、挨拶は思春期になると恥ずかしがってしまい、しなくなる傾向がある。ただ、社会人になると挨拶を求められるので、挨拶は当たり前であると家庭を含めて育てていかななくてはならないと思う。また、サポートをもらえることが当たり前だと思っている方がいらっしゃるが、甘えなのではないかと感じている。
- 玉木 委員 障害者スポーツ大会があると、会社は休むのが当たり前だというような考えで参加してしまっていた人もいたのかもしれない。今の協議会での話し合いを経

て、学校の方からも感想を聞かせてほしい。

小林教諭 今後も通級指導を充実させ、自立できる子を育てていきたい。

赤堀教諭 交流籍交流などの機会を有効に生かしていきたいと感じた。

本間教諭 コロナ禍だから体験学習ができないということにならないように、どうしたらできるのかを検討していきたい。

副校長 若い世代の方は欲が無いと思う。指示がないと動いていけないことは課題だと感じている。読んだ本の中に、今の時代、働くのはお金のためというよりは、自己承認や自己実現のためであると書かれていた。そういう思いをもっていることを理解して関わっていかなくてはと思う。

校長 以前、日軽金の方々が特支校に研修にいらっしゃった。初任者と企業の方々と話し合いをする機会を設けたこともあったが、話している様子を見てみるとそれぞれの立場で考え方の違いがはっきりとしていたことを思い出した。また、企業体験の引率をした時、企業から言われたことは、「仕事は今できなくても就労後に身に付ければ良い。挨拶と困った時に声が出せる子に育ててほしい。」と言われた。今日の話から改めてその通りだと思った。

玉木委員 教員の力は大きい。特に基礎的な学力を高めることは、学校に期待されることである。

7 事務連絡など

今回は、10月17日（月）午前9時半から正午までを予定している。